

特別講演会

奈良時代の西大寺

令和 5 年 12 月 9 日 (土)

13:30 ~ 17:00

奈良市西部会館市民ホール

〒631-0034

(学園前ホール)

奈良県奈良市学園南三丁目 1 番 5 号 西部会館 3F
<https://gakuenmaehall.com/access/>

定員 300 名 (事前申込要)

西大寺創建と法燈の継承

佐伯 俊源 西大寺

西大寺旧境内の発掘調査

今井 晃樹 奈良文化財研究所

西大寺跡第 25 次調査の 成果について

久保 邦江 奈良市埋蔵文化財調査センター

西大寺出土の木簡

馬場 基 奈良文化財研究所

本講演会はオンラインによる視聴を行いますので、
希望される方は、以下のオンライン視聴申込み
フォームの URL によりお申し込みください。

URL:<https://gtcenter.jp/nabunken/>



【申込み方法】住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上、

メールまたは FAX で下記までお申しだみください。

事前申込みのない方は難儀できません。

Email : kouentai_nabunken@nich.go.jp

FAX : 0742-30-6750

* 参加の可否を回答いたしましたので FAX の場合は、FAX 番号をご記入ください。

* メール 1 送信につき、お一人さまのお申しだみでお願いいたします。

同じメールアドレスを使って複数のお申しだみをしていただいている場合も差し支えありませんが、1 送信につき、お一人さまをお願いいたします。

奈良文化財研究所都城発掘調査部創設 60 周年記念
西大寺特別公開講演会
「奈良時代の西大寺」

令和 5 年 12 月 9 日 (土)

於：奈良市西部会館市民ホール（学園前ホール）

【プログラム】

- 12:30 受付、開場
13:30 開演（スケジュール説明、講演者の紹介等）
13:35 奈良文化財研究所長 挨拶
13:40 講演「西大寺創建と法燈の繼承」
　　真言律宗總本山西大寺
　　佐伯 俊源（さえき しゅんげん）
14:25 講演「西大寺旧境内の発掘調査」
　　都城発掘調査部副部長
　　今井 見樹（いまい こうき）
15:00 休憩
15:20 講演「西大寺跡第 25 次調査の成果について」
　　奈良市埋蔵文化財調査センター調査係長
　　久保 邦江（くぼ くにえ）
16:05 講演「西大寺出土の木簡」
　　都城発掘調査部平城地区史料研究室長
　　馬場 基（ばば はじめ）
16:50 閉会挨拶
17:00 終了

目 次

講演「西大寺創建と法燈の継承」 P 1

真言律宗總本山西大寺 佐伯 俊源

講演「西大寺旧境内の発掘調査」 P 6

都城発掘調査部副部長 今井 晃樹

講演「西大寺跡第25次調査の成果について」 P 13

奈良市埋蔵文化財調査センター調査係長 久保 邦江

講演「西大寺出土の木簡」 P 21

都城発掘調査部平城地区史料研究室長 馬場 基

西大寺特別公開講演会

西大寺創建と法燈の継承

西大寺執事／種智院大学教授
佐伯 俊源

はじめに

～ 西大寺史をめぐる二つのエポック 奈良朝創建と鎌倉復興

1260 年近くの星霜を積み重ねてきた西大寺の歴史を俯瞰した際に、最も光彩を放つ時期として、

I 本願称徳女帝の勅願によって奈良時代末期に「鎮護国家」の官大寺として建立された古代の創建期と、

II 中興開山叡尊上人によって鎌倉時代中期に「興法利生」の道場として再建された中世の復興期の二つの時期をあげることに異論はないであろう。西大寺の歴史的由緒は、古代創建当初の古層の上に、中世復興期の新層が加上されて形成されていると理解するのがオーソドックスな捉え方である。

とくに後者 II では、平安時代に創建期以来の大伽藍が一旦衰頼した後に、叡尊上人が志向した密律双修の「真言律」の根本道場として、全く面目を一新した中世寺院としてリニューアル再生されたのであり、爾來約 800 年にわたって継承してきたのは、直接的には中世に再興された真言律の法燈であったといえる。

現在、境内諸堂で奉祀される諸本尊は、叡尊ゆかりの鎌倉時代の造像が殆どである¹⁾。また、境内の堂舎建物は、文亀 2 年（1502）の兵火により叡尊復興の伽藍の大部分が灰燼に帰してしまい、その後に江戸時代に再建された堂舎が殆どであるが²⁾、基本的な伽藍配置は叡尊復興のプランを踏襲するものである。

ここに掲げた図 A は現在の西大寺の境内図であり、図 B は西大寺に伝わる『西大寺寺中曼茶羅』（重要文化財）である。後者は、弥勒堂（食堂）が焼失した徳治 2 年（1307）以降、文亀 2 年以前の、叡尊復興の中世西大寺の景観を描いたものとされるが、両者を比べると、B に描かれた堂舎がそのまま現代にまで伝存している建物はないが、伽藍配置自体は中世以来のプランが踏襲されていることがわかる。

以上のような点からも、現代に受けがれる西大

寺の伝統由緒は、直接的には叡尊上人によって復興された中世寺院の姿を基本とするものであることがご領解いただけよう。

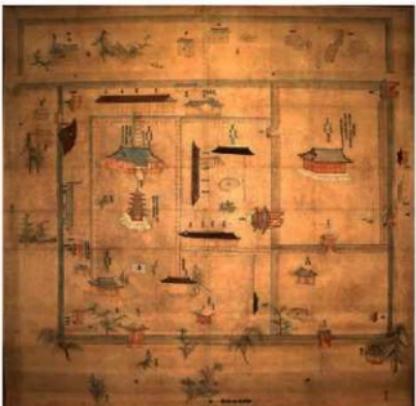
現在の西大寺の二大年中行事である光明真言土砂加持大法会（10月3日～5日）と大茶盛式（初釜1月16日、春季4月第2土曜・日曜、秋季10月第2日曜）も、その由来は叡尊上人の興行に遡及するものであり、西大寺の有形・無形の法燈は中世復興期の内実を現代に伝承するものといってよかろう。

逆に言えば、称徳女帝によって創建された当時の古代西大寺の古層の姿（上記 I）は、形としては早く消失してしまい地中に埋没してしまった。我われは、かろうじて伝存されてきた片々の文物を通じて往時の姿を偲ぶよりほかないのである。

図 A 現在の西大寺境内図



図 B 西大寺寺中曼茶羅



1、創建の由来と伽藍 ～ 本願女帝の護国理念

そのような状況の中でも、創建当初の堂塔房舎、仏像などの構成・規模などを記載した『西大寺資財流記帳』(宝亀11年(789)勘録、室町期頃の写本)が遺されていることは幸いであり、これを通じて創建の由来と、当初の大寺院の伽藍の全容をある程度うかがい知ることができる。

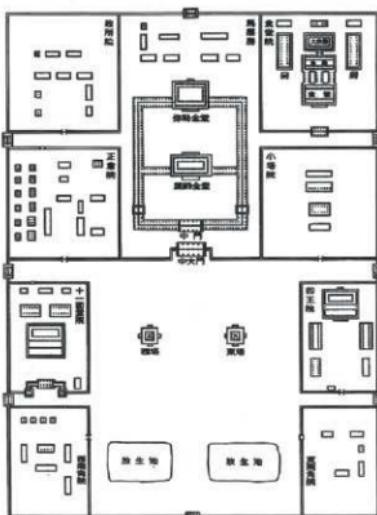
既述の通り西大寺は天平神護元年(765年)に称徳(孝謙)女帝の勅願により創建された。女帝の父は聖武天皇、母は光明皇后で、父帝が平城京の東郊に大仏を核とする東大寺を創建したのに対し、娘帝は宮西の地に西の大寺を開創した。『資財流記帳』冒頭の「縁起坊地」に次の記述がある。

夫れ西大寺は、平城宮に御宇したまう宝字称徳孝謙皇帝、去る天平宝字八年九月十一日、七尺金銅四王像を敬造し、兼ねて彼の寺を建てんことを誓願す。乃ち、天平神護元年を以て件の像を鑄し創め、以て伽藍を開くなり(以上、読下し)

『続日本紀』によれば、宝字8年(764)9月11日は奈良朝後期の政界を揺るがした藤原仲麻呂の反乱が発覚した日であり、孝謙上皇はまさしくその日に反乱鎮压を祈願して西大寺の礎となる四天王像铸造の誓願を立てられた。その翌年に称徳天皇として重祚して以後、鎮護国家の功徳を持つ仏として当時盛んに信仰されていた四天王を核とする伽藍の開創に本格的に着手された。西大寺はそうした奈良朝時代の佛教信仰を背景とする護国祈願の寺として出発したのである。西大寺の創建が、他の寺院が通常は金堂院などの中心伽藍から着手されるのと異なり、四天王をまつる四王院が先行したことには本願天皇の本懐の在り処が如実に反映されているといえよう。

資財帳によれば、創建時は平城京右京一条三・四坊の総計31町歩(48ヘクタール)の敷地に、金堂院(薬師・弥勒の二金堂と東西両塔あり)をはじめ、十一面堂院、西南角院、東南角院、四王院、小塔院、食堂院、馬屋房、政所院、正倉院などの区画(中央の金堂院を中心に、東方から時計回りに記載)に百十数の堂舎が甍を列ねていた。以下に創建当初伽藍の復元案(図C)を掲げておく。

図C 西大寺創建当初伽藍復元案



これらの堂舎の中には、時代を先取りした密教的色彩の強い仏像群や、異国情緒漂う莊嚴が多く加えられていたこともうかがえる⁴。また当初、東西両塔とともに八角七重塔として設計されていたが、それも大陸の新しい建築モードを取り入れるとともに、女帝ならではの佛教信仰の情熱が傾注されていたとみることができよう⁵。

しかし、創建当初の華麗な寺院の姿は、現在はほとんど残っていない。わずかに四天王の足下に踏まれる邪鬼が天平彫刻の片鱗を今に伝えるのみである。平安遷都後は、朝廷の庇護から遠のき、天災による堂舎倒壊も相次ぎ、寺勢は急速に衰退した。その後は鎌倉時代を待たねばならなかった。

こうした点からすると本願女帝の法燈は早くに断絶したと思われるかもしれないが、後世の復興において絶えず意識されてのは、「本願の再興」であった。

本願女帝の思いは、形を変えつつも寺の法燈に連綿と伏流し続けてきたというべきであろう。寺西方の丘陵には目立たないながら、女帝の別荘跡「称徳山莊」や、女帝の御陵として寺伝のある「高塚」などの称徳女帝とゆかりの深い遺跡が現在も点在している。

西大寺所蔵 称徳天皇御影（住吉広保画、江戸中期）



2、密教的モードの導入 ～道鏡禪師の関与

本願称徳女帝とともに西大寺創建の背後にはもう一人の重要な人物がいる。道鏡禪師である。道鏡は河内国弓削郷（現大阪府八尾市）出身で俗姓は弓削氏。弱冠より義淵僧正に師事して法相教学を学ぶ一方、葛城山中で如意輪法などの密教修行を行って呪力を身につけ、梵文（サンスクリット語）にも精通した。その禪行を認められ看病禪師として宮中の内道場に入り、天平宝字6年（762）保良宮で孝謙上皇の看病に功あって以降、その寵愛を受けて政界にも進出する。藤原仲麻呂敗死後の宝字8年（764）9月に大臣禪師、翌年に太政大臣禪師、更に翌々年には法王に任命され、奈良朝末期の朝廷に権勢をふるった。

道鏡が西大寺造営を主導したことと直接に物語る史料はないが、天平神護元年（765）以来、度縁（僧尼の出家証明書）には道鏡印が捺されるようになったとあるように、自らが得度權を掌握して大量の僧侶を産み出した。そうした僧侶を収容し自己の権力

基盤を拡げるべくして西大寺のごとき大伽藍を現出せんとしたと考えることは失当ではあるまい¹⁶。神護景雲3（769）にはいわゆる宇佐八幡神託事件で皇位就任を企図したが果たさず、翌年の女帝崩御後、下野薬師寺（栃木）に左遷され2年後に配地で没した。

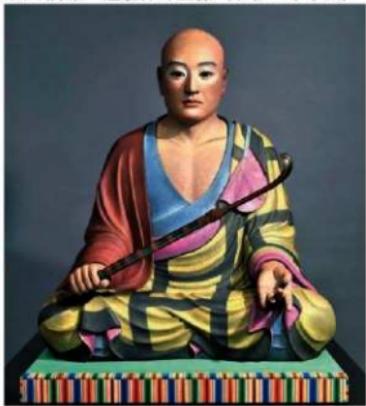
このような道鏡に対する評価は、仏徒でありながら女帝に近づいた淫僧、政治に介入し皇位を篡奪しようとした悪僧として頗る悪い。しかし、それがそのまま道鏡の実像であったかは疑問である。そうしたイメージは後世に作られたものである面が強い。全くの聖僧とはいえないにせよ、少なくとも學問・禪行の面で類いまれなる能力を持った傑僧であった点は否定できない。とくに平安時代の開幕とともに奈良朝の學問仏教の閉鎖性を打破って真言宗を開宗した弘法大師空海などにより体系的かつ実践的な密教（正純密教、純密）が樹立されることになるが、道鏡はいわばその前提となる奈良朝密教（雜部密教、雜密）の地平を開拓した宗教者であったと評価することができる。

雜密といえば、十一面觀音、如意輪觀音、千手觀音などを本尊として密教修法により現世利益を追求する變化觀音への信仰が大きな柱であるが、創建期の伽藍に、称徳天皇の本願である金光明經に依拠する鎮護国家を体现する四天王を中心とする四王院とちょうど東西対称の位置に、陀羅尼集經などに基づく十一面觀音を奉祀する十一面堂院が設置されたことは、きわめて示唆的である。四王院が本願天皇の護國理念を掲げた肝煎りの空間であったのに対し、十一面堂院は、道鏡が主導した雜密信仰とその実践的修行のための道場として現出せしめられた空間であったのではなかろうか¹⁷。

いずれにしても、道鏡はいわば落日の爛熟した輝きを放つ奈良宮廷において仏教への依存が極度に進む時代背景の中で出現した時代の寵兒であった。その存在の善し悪し云々を道鏡個人の宗教的資質のみに還元してしまうのは不当な見方ではあるまいか。道鏡の復権をめざして、ここ20年来、「道鏡を知る会」（道鏡出生の八尾が中心。残念ながら令和2年解散）、「道鏡を守る会」（配地である栃木・東京方面が中心）などの市民グループがさかんに顕彰活動を進められ、令和2年には、「道鏡を知る会」の方々が等身大の道鏡禪師像を製作されて西大寺に奉納された。道鏡の存在なくして奈良仏教の伝統は後世に継承發

展されなかつたことに思いを致し、顕彰を進めたいと思う。

西大寺所蔵 道鏡禪師坐像（令和二年奉納）



3、旧境内地の発掘

～食堂院発掘を中心に

迅く地中に埋没してしまった称徳女帝・道鏡禪師による創建当初の伽藍は、以上のように資財帳などの文献史料を通じて往時の姿をある程度偲ぶことができる。それに加えて、西大寺周辺市街地の再開発が進む中で、周囲の西大寺旧境内地各所の考古学的な発掘調査がここ半世紀以上の間に断続的に行なわれ、創建当初伽藍の具体的な様相の一部が明らかにされつつある。

2000 年代に入って以降の近年の主だった成果としては、2009 九年に奈良市が行なった西大寺十一面堂院・西南角院推定地の発掘調査（奈良市、西大寺旧境内地第 25 次調査）により、東西溝遣構から石上宅嗣の官職・位階を記した木簡はじめ約 2000 点の木簡（削屑含む）や、「皇甫東長」銘の墨書き土器、また西アジアで製作・舶來したと推定されるイスラム陶器などが出土し、創建当初期の西大寺を取り巻く政治性、国際性が再認識された¹⁰。

また、中心伽藍である金堂院の区画についても、奈良文化財研究所、奈良市により 2006 年～ 2014 年にかけて各区域の発掘が行なわれ、薬師金堂の礎石を設置するための巨大な据付石が一定間隔に並置さ

れた状況が当初のまま出土するなど、その規模の壮大さが如実に明示された。更に近時 2023 年には、残念ながら遣構保存には至らなかつたものの、弥勒金堂の基壇東北部が発掘によりはじめて確認された。

そして、2003 年に奈良市、元興寺文化財研究所、2006 年に奈良文化財研究所によって行われた旧境内東北に位置する食堂院区画の発掘調査により、このたびの共同研究の対象となる種々の遣構・遺物が発見された。資財帳に記載される「大炊殿」「檜皮殿」などの中心堂舎が確認され、ある程度の全容が判明したとともに、大炊殿の南東部から一辺約 2.3 メートルの井戸組で組まれた平城京内で発見された最大規模の巨大な井戸の遣構が発掘され、その埋土から土器などと併せて多数の木簡も出土し、創建当初の食堂院という寺内組織の日常的活動の具体的な様相が明らかになった¹¹。

古代寺院の食堂院は、寺院に在籍する僧衆や俗人が食事を摂る食堂を中心に、食材の保管・調理・配膳などを行ない、各堂舎で奉斎する供物などの調製も行なう部局であるというのが一般的な理解である。井戸出土の木簡の内容は、まさしく食材の進上、保管、ならびに食料・食材の支給に関わるのが主であった。創建当初の西大寺には、おそらく一千人規模の多数の僧衆・俗人が在籍していたと推測され¹²、巨大な井戸が設置されたことも首肯されるが、木簡を含む食堂院発掘の諸成果は、大人數の食事を貯うことを担った食堂院の実態を物語る具体的な史料として、単に西大寺一寺のみならず古代寺院の食堂院のあり方を考える上でも貴重な史料であるといえよう。

この井戸遣構から出土した木簡の中で年記のみえるものは延暦の年号が記されたものが多く、この井戸は創建から数十年のわずかな期間のみ機能したものの、延暦年間以降には廃絶し埋められた可能性が高いのではないかと思われる以下のような諸点もそれに加えられる特徴である¹³。おそらく、西大寺自体が平安遷都後に旧都の寺院として朝廷の庇護から遠のいて縮小を余儀なくされ、急速に衰頽してゆく歴史的推移の中で、巨大な井戸は必要とされないような状況が現出されたものであろうか。食堂院自体が廃絶したわけではないにせよ、創建当初の食堂院が本来の機能を十全に果たして活発に機能したのは、奈良時代末から平安時代初頭の限られた時期であつたのかもしれない¹⁴。

おわりに

～西大寺創建の寺院史的意義

西大寺は平城京時代に営まれた最後の官大寺であり、後世「南都七大寺」と総称される奈良時代創建の勅願寺の一つに含まれながら、既に平安仏教の新しいモードの諸要素も先取りした内実を一部含んでいた。先述した密教的な要素や、八角七重の東西両塔の当初計画などのほかにも、以下のような諸点もそれに加えられる特徴であろう。第一に、他の寺院では通常、金堂の背後に講堂が設置されるのに対し、西大寺では講堂という名称の堂舎は設けられず、薬師仏を本尊とする薬師金堂の背後には弥勒仏を本尊とする弥勒金堂のダブルの金堂が設置されていたこと。第二に、寺内僧衆の住居空間である僧房についても、他寺院では金堂・講堂などの中枢伽藍を取り囲むように設置されることが多いが（東西北の三方コの字型に配置される三面僧房など）、西大寺には懇寺全体の僧房は設けられず、四王院、十一面堂院などの区画ごとに個々に分散して僧房が設けられていることである。平安時代になると寺院社会における師資相承の原理の浸透に伴い、懇寺僧房から私僧房への遷移が進み、更に子院（塔頭）の形成へと進むが、創建期西大寺における区画ごとの居住居室の設置は私僧房の萌芽として評価されうるものであろう。こうした点は寺内僧衆の編成や、修行や日常生活に大きな影響を及ぼしたであろうし、寺内の食生活を担う食堂院の存在形態にも深く関わる課題であるが、詳細については後考を期したい。

（※本稿は三船隆之・馬場基編『古代寺院の食を再現する西大寺では何を食べていたのか』2023年4月、吉川弘文館刊に掲載された拙稿を一部改稿の上、転載したものである。）

時代創建当初の由緒を伝える仏像であるが、足下の邪鬼が一部創建当初の姿を伝えるのみで、四天王像自体は中世の補作である。

*2 四王堂は延宝2年（1674）、本堂は宝暦2年（1752）、愛染堂は宝暦12年（1762）の再建。

*3 既往の伽藍復元案はいくつか提示されているが、ここに掲げたのは、奈良市『平城京復元模型記録』1978年による。

*4 佐和隆研『西大寺創建当初の美術』『仏教芸術』62号、1966年）、栗原治夫『西大寺創建当初の諸尊』『大和文化研究』11-6、1966年）

*5 称徳天皇崩御の後、計画変更されて結果的には四角五重塔として建立された。右大臣藤原永手による塔の規模縮小については、『日本書紀』下巻36話の説話の中で言及がある。

*6 高山寺藏『宿曜古文抄』所収の道鏡伝には、仲麻呂乱直後の宝字8年（764）9月29日に法華寺淨土院で自ら師主となり一千人を得度したとみえる。ちなみに、天平19年の『法隆寺伽藍起并流記資財帳』に「合見前僧百陸拾參口 僧一百七十六口 沙弥八十七口」、『大安寺伽藍起并流記資財帳』に「合見前僧捌百捌拾柒口 僧四百七十三口 沙弥四百十四口」とみえ、奈良時代中期の大寺院には数百をもって数える多数の僧衆が在籍居住していた。奈良時代後期創建の官大寺である西大寺にはそれを上回る多数の僧衆が居たのではないかと推察される。

*7 このような視点から西大寺創建の状況を再検討した近年の研究に、近藤友宜『西大寺の創建と称徳天皇』（勉誠出版、2013年2月）がある。また大橋一章・松原智美編『西大寺—美術史研究のあゆみー』（里文出版、2018）も参照。

*8 奈良市埋蔵文化財調査センター編『西大寺旧境内発掘調査報告書1』（本篇・文字資料篇）（2013年3月）

*9 奈良文化財研究所編『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書』（2007年3月）

*10 注6参考

*11 注9報告書では木簡年記（一点）の「正暦」の可能性も認めて、10世紀末まで下降する一案も併せて提示されているが、正暦とみえるのは延暦の崩し表記であり、私見では延暦年に収まるとみるのが妥当と思われる。この点については以前に言及したことがある。「奈良新聞」2006年11月29日「木簡の「正暦」は「延暦」？」

*12 『日本紀略』応和2年（962）8月30日条には、大風雨で西大寺食堂一字が傾倒したとみえ、この頃までは食堂院の堂舎・機能の一部は存続していたことは確認できる。

*1 本堂安置の本尊・釈迦如来立像は建長元年（1249）叡尊の命による造像。西脇壇の文殊菩薩騎獅像・四侍者像は正安4年（1302）叡尊13回忌に開眼。東脇壇の弥勒菩薩坐像は元亨2年（1322）叡尊33回忌の開眼。愛染堂の毘仏本尊・愛染明王坐像は宝治元年（1247）叡尊が願主となり造像。四王堂の本尊・十一面觀音立像は鳥羽上皇御願白河十一面堂の旧本尊で龜山上皇の院宣によって正応3年（1290）に西大寺に移安。その左右に安置される四天王像はからうじて奈良

西大寺旧境内の発掘調査

今井晃樹

(奈良文化財研究所都城発掘調査部)

はじめに

西大寺は孝謙太上天皇（のちの称徳天皇）が天平宝字8年（764）に発願して造営した勅願寺である。その造営過程を記す記録は少ない。しかし、『続日本紀』、『延暦僧錄』、『扶桑略記』等の史料からある程度復元できる。それらを総合すると、四王堂、薬師金堂、弥勒金堂、西塔、東塔の順に建てられたことがわかる。宝亀11年（780）の『西大寺資財流記帳』（以下『資財帳』と略す）には、創建期の伽藍の状況を詳しく記述しており、上記の堂塔のほか、十一面堂院、西南角院、小塔院、食堂院、馬屋房、政所院、正倉院などの存在を確認できるが、それぞれの造営年代は不明である。しかし、これらの堂塔が780年以前に完成していたことはあきらかであろう。

その後、平安時代の「弥勒金堂が倒壊したので、仏像を食堂に安置してある」（『七大寺日記』）、「食堂、四王堂、東塔のみ残存」（『七大寺巡礼私記』）の記載、鎌倉時代に叡尊が伽藍規模を縮小して四王堂、東塔、食堂を中心に復興した（『金剛仏子叡尊感身正記』）等の記録をみると、次第に創建時の伽藍が失われていく状況が読み取れる。

以下では、発掘調査を実施した四王堂、東西塔、食堂院をとりあげて、調査成果、建物規模の復元、現存する創建期の仏像等を紹介する。なお、西大寺における発掘調査の位置は図1に示した。

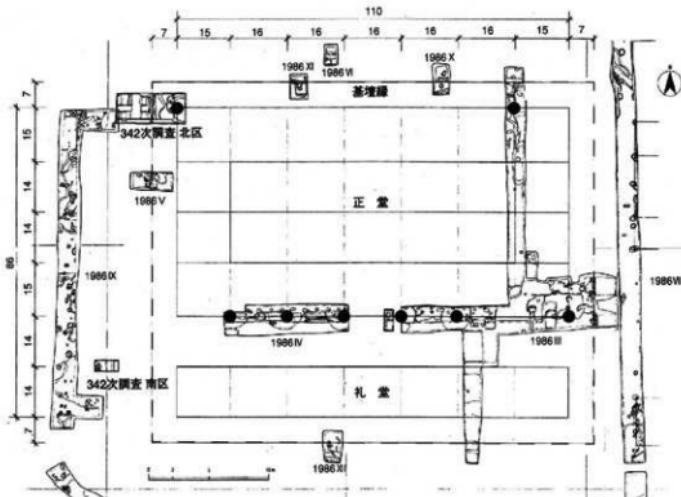


図2 四王堂の発掘調査位置図と建物の復元図

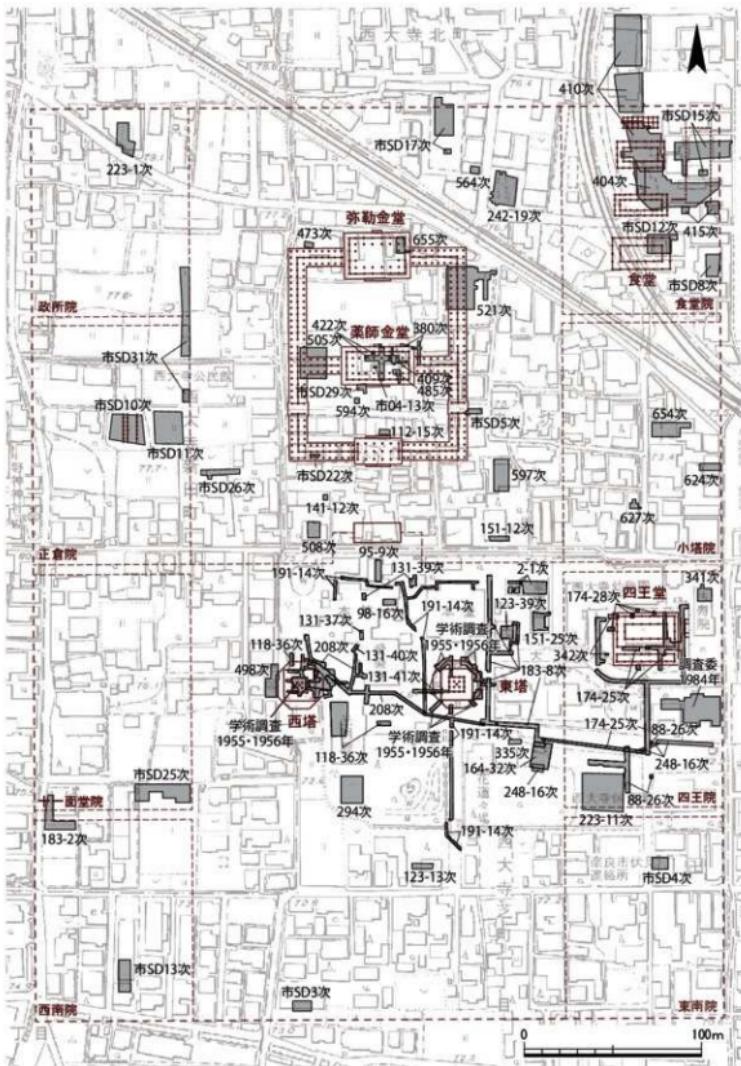


図1 西大寺伽藍と発掘調査位置

四王堂

歴史 西大寺において最初に造営されたお堂である。惠美押勝の乱（天平宝字8年（764）9月11日）平定のため、同日に孝謙太上天皇が四天王像造立の発願、翌天平神護元年に四天王像を青銅で铸造し伽藍を開いた。四王堂の創建は天平神護2年（766）と考えられる（「大毘盧遮那經」の奥書 同年10月8日）。その後、幾度かの建て替えがあり、現在の四王堂は延宝2年（1674年）に建てられた。建物の周囲には、かなり大きい基壇が残存しており、奈良時代創建期の基壇規模を今に伝えている。

発掘調査 1986年の防災施設の工事にともなう調査が最初であり、その後2002年に基壇の西縁を調査した。

創建期の建物の柱抜取穴を計8か所検出した。南側柱6基、北側柱1基、西北隅柱1基である（図2）。柱抜取穴は深く、基壇土を突き抜け地山まで達している。建物は7×4間の東西棟の掘立柱建物に復元できる。西北隅の柱抜取穴の直上では礎石据付穴を確認した。平安時代に掘立柱建物から礎石建物に改修するも、建物規模は創建期のものを踏襲していることがあきらかになった。

基壇外装は東縁と西縁で確認している。瓦積み基壇外装の基部に凝灰岩があることから、創建期の基壇は少なくとも凝灰岩の切石を使用した基壇であろうと考える。その後、創建期と同じ位置で凝灰岩を再利用し、さらに軒丸瓦・軒平瓦・平瓦、川原石を積んで構築した基壇に改修したことがあきらかになった（図3）。基壇に使用された軒平瓦に平安時代前期の瓦が含まれていたため、平安時代に改修されたことが判明した。基壇の東西両縁の距離から基壇の東西幅は約36.8m（約125尺）となる。

『資財帳』によれば、四王堂は「檜皮葺雙堂二字、各長十一丈、雙廣八丈六尺」とある。発掘調査で検出した柱穴の位置は、桁行（東西の長さ）11丈（32.6m）と一致する。雙（双）堂とは、北に正堂、南に礼堂が並ぶ建物である。礼堂の柱位置は発掘調査で確認していないが、礼堂が梁行1間の建物と想定して図2のように復元した。

発掘調査の成果から、四王堂の変遷は以下のように考えられる。創建期は凝灰岩基壇と掘立柱建物であった。平安時代に瓦積み基壇と礎石建物に改修したが、10世紀末頃に焼失する。その後、基壇を補修して再建したのは、文献史料から長保6年（1004）の可能性が高い。この建物は保延4年（1138）に別当済円による補修をへて、鎌倉時代の寂尊へも引き継がれた。

堂内の様子 創建期の堂内の様子は『資財帳』に詳しい。それによると、堂



図3 四王堂の基壇西縁の瓦積み基壇

内には須弥壇があり、その中央に八角五重小塔、塔の両脇に乾漆の火頭菩薩像（高さ一丈一尺余 約 3.3m）、須弥壇の四隅に金銅の四天王（高さ 7 尺 約 2.1m）が安置されていた。このほか、壇上には塑像の太子像（高さ 3 尺 約 90 cm）など計 7 体を配置していた。

創建期に造像した金銅四天王像は現在ほとんど失われているが、四天王の足と裾の部分、4 体の邪鬼像が今も寺に伝えられている。堂内は『金光明最勝王経』の世界を再現したものであろうと考えられる。この経典は、聖武天皇が鎮護国家を目的として重んじたお経の一つである、聖武の娘である称徳天皇も父に従い、同経を仏堂造営の根本経典としたのであろう。

東西塔

歴史 西塔は、宝亀 3 年（772）と同 7 年（776）に落成しており（『続日本紀』）、772 年以前には完成していた。東塔は、「宝亀元年（770）に東塔の心礎を東大寺東の飯盛山から切り出したが、石に祟りがあるというので、火を焚いて割って道に捨てた」（『続日本紀』）という記事から、西塔より遅れて造営が始まったと思われる。

東西 2 つの塔は、当初八角七重の設計であった。景雲間（767～769）に八角塔の設計図あるいは模型を作成した（『延暦僧錄』）との記録があり、また、「太政大臣藤原永手が八角七重塔を四角五重塔に変更したので地獄に落ちた」（『日本書異記』）との話も伝わっていた。

その後、延長 6 年（928）7 月 11 日（『扶桑略記』）に塔 1 基が焼失した。保延 6 年（1140）に塔 1 基がのこる（『七大寺巡礼私記』）とあり、これは東塔をさしていることから、延長 6 年に焼失したのは西塔であろう。その後、西塔は再建されなかった。東塔は文亀 2 年（1502）5 月 7 日に兵火で焼失した（『大乘院寺社雜事記』）。西塔は江戸時代に基壇が削平され、現在は平地となっている。東塔の方形基壇は現境内の中央に現存する。

発掘調査 東西両塔の発掘調査は 1955 と 1956 年に実施した。その結果、方形基壇の下層に八角形の掘込地業が存在することがあきらかになった（図 4・5）。地業は深さ 0.5～0.9m で、底には径 20 cm ほどの川原石を敷いてから版築している。地業の径（幅）が 26.7 m（90 尺）であることが判明した。東塔に残る方形基壇の一辺は 17m（57 尺）であることから、八角形基壇は方形基壇よりもかなり大きいことが想定される。

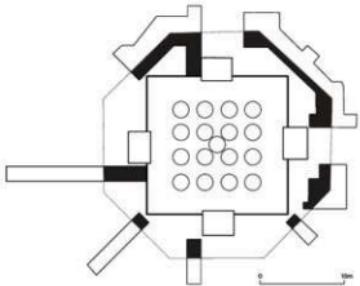


図 4 東塔の発掘調査平面図



図 5 東塔の八角形掘込地業の様子

1981年の調査では東塔方形基壇の西縁を調査した。この時は方形基壇を断面調査し、八角形の掘込地業と基壇土の存在をあきらかにした。また、八角形地業と基壇から和同開珎1点ほか、銭文不明銅裁3点が出土した。西塔の旧跡を寛政6年(1794)に掘削したところ「開基勝寶」、「萬年通寶」、「神功開寶」が出土したという記録が残る(「龍池院金銭記」)。これらの銭貨は、地業や基壇を構築する際に実施した地鎮の鎮壇具と思われる。

以上の発掘調査によって、西大寺の両塔が計画当初は八角七重塔であったが、工事途中で四角五重塔に変更されたことが実証された。『資財帳』によれば、五重塔の高さは15丈(約44m)という。変更前の八角七重塔の地業規模26.7mは東大寺東塔(七重塔)の方形基壇一辺24.2m(82尺)に匹敵する大きさである。西大寺は、東大寺塔に勝るとも劣らない規模の塔の造営を計画していたことが判明した。

出土遺物と仏像 遺物の大半は屋根瓦であるが、特筆すべきは、施釉の垂木先瓦である(図6)。円形と方形の2種類があり、それぞれ軒の地垂木と飛檐垂木の先端を飾る瓦である。西大寺では塔に集中して出土する。そのほか、仏像の台座状土製品や埴仏などもある。埴仏は塔の初層内部の壁に飾られていたと考えられる(図7)。

仏像では、塔に納められた塔本四仏がある。様式からみて奈良時代末頃の作品で、釈迦、阿闍、阿彌陀、宝生如来である。高さ70~75cmで国の重要文化財に指定されている。780年の『資財帳』に記載がないことから、その後に製作、安置されたものであろう。西塔は10世紀には焼失し再建していないことから、この四仏は東塔に安置されていたと考えられる。類例は興福寺、東大寺にあり、興福寺五重塔には薬師、釈迦、阿彌陀、弥勒を安置していた。東大寺東塔にも四方淨土(四仏)、西塔には経典を安置していたことが知られている。

食堂院

歴史 食堂院とは、文字通り僧侶が食事をする場所であるが、次第に仏堂化していく変遷がみられる。院の中央には、南から瓦葺の食堂、檜皮葺きの殿、瓦葺の大炊殿、瓦葺きの双倉が並び、左右には檜皮葺きの厨と、瓦葺きの倉代があった。『資財帳』に記載があることから、780年以前には完成していたであろう。その後、応和2年(962)に食堂が大風雨で倒れた。嘉承元年



図6 施釉の垂木先瓦



図7 西塔出土の埴仏

(1106)に弥勒金堂が倒壊後、その仏像を食堂に移し弥勒金堂とした(『七大寺日記』)。保延4年(1138)には食堂も修繕されたが、徳治2年(1307)に焼失し、その後は再建されなかった。

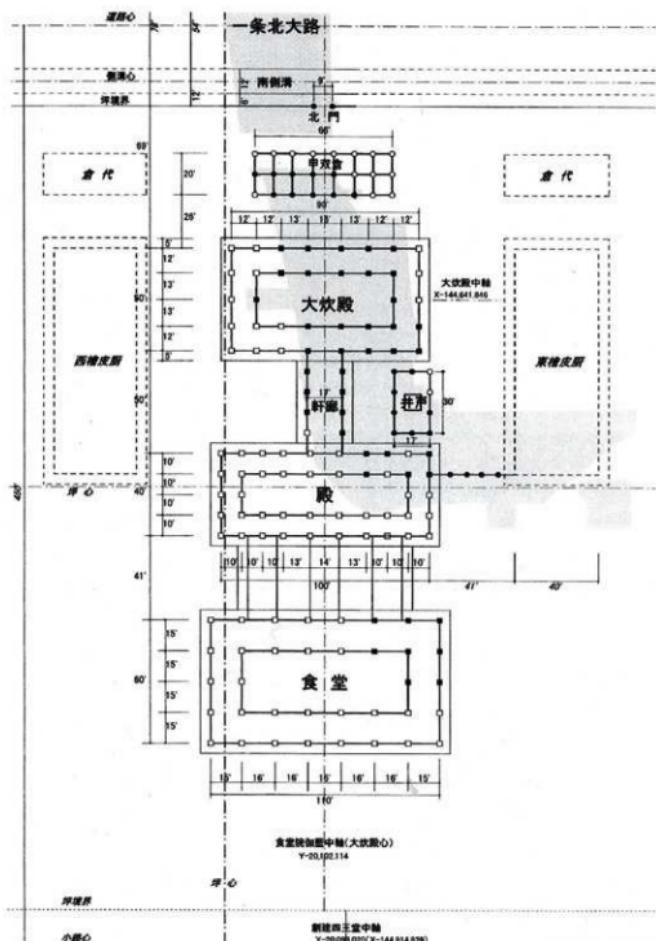


図8 食堂院の発掘調査区位置図と建物の復元

単位は尺 口は礎石建ち ○は据立柱 黒塗りは棟出済み 白塗りは復元 文字斜体は推定を示す

発掘調査 奈良市が1997年に食堂、2003年に埋甕、奈文研が2006年に食堂院を調査した(図1・8)。調査成果から各建物の大きさを復原すると、食堂は 7×4 間の礎石建物、殿は 9×4 間の礎石建物、大炊殿は 7×4 間の礎石物、甲双倉は 7×2 間の掘立柱建物、東檜皮厨には埋甕列があり、1.5m間隔で配置、総数80個以上あったと考えられる。そのほか、殿と大炊殿の間に井戸が発見された。井戸枠の大きさは一辺2.3mの方形で、深さ2.8m以上あった(図10)。3×2間の井戸屋形も確認した。井戸を埋め立てた土の中には、多量の遺物が投棄されており、なかでも延暦11年(792)と記した木簡が含まれていたことから、8世紀末には埋没したと考えられる。

出土遺物 奈良三彩の杯や椀が出土した。これらは仏前に供物を供する際に使用したものである(図9)。「西大寺」、「西寺」と書いた墨書き土器もある。このほか、井戸の中からは、製塩土器、木器・木製品が多数出土した。製塩土器は、海辺で作った塩を器ごと運んできたものであり、料理や漬物などに使用した。木製品は曲物、皿、匙、杓子、箸などの食器が多くみられる。埋甕は多数の須恵器甕を整然と並べておらず、おそらく漬物、酢や味噌などの調味料を作り保存していたと考えられる。このように、食堂院の発掘調査では、奈良時代の僧侶たちの食事にかかる様子を知るための貴重な資料が得られた。

井戸は平城京内でも最大級の規模を誇り、その井戸枠の板材もりっぱなものである。ヒノキ材で厚さが6~10cmもある一枚板を惜しげもなく使用している。表面には「西」、「大」、「字」の刻印、あるいは墨書きがあり、納品場所を示したものであろう。板の年輪年代を計測したところ、767年頃に伐採された材であることが確認できた。西大寺造営の年代とも整合する。

おわりに

これまでの発掘調査により、西大寺最初のお堂である四王堂の創建建物の様相があきらかになり、塔は伝承どおり八角塔から四角塔へ設計変更されたことが証明された。また、早くに焼失し位置や規模が不明であった食堂院の実態が判明したことで、創建期西大寺の伽藍が現境内より相当に大きいことが改めて認識されることとなった。近年は、薬師金堂、弥勒金堂およびその回廊の位置や規模があきらかになり、創建期伽藍の復元研究は大いに進展した。



図9 奈良三彩の杯



図10 食堂院の井戸

西大寺跡 第25次調査の成果について

奈良市埋蔵文化財調査センター 久保 邦江

I. はじめに

「海の道 伝えた青」(2009年7月4日朝日新聞)。「石上宅嗣の官職木簡」(2009年12月4日奈良新聞)。「「皇甫」膨らむ人物像」(2010年4月9日読売新聞)。これらは2009年に実施した西大寺跡第25次調査の成果について報じる新聞の見出しだである。日付からもわかるように、3回の報道発表をおこなった。最初の記事はイスラム陶器の出土に関するもの。二番目は石上宅嗣の官職が記された木簡の出土。三番目は唐から来日した「皇甫東朝」の名が記された墨書き器が出土したことである。それぞれ大きく取り上げられ、特にイスラム陶器の出土に関しては、海外メディアから取材を受ける程であった。

多くの方々の協力を得、2013年に成果をまとめた報告書を刊行することができた。また、昨年2022年にはイスラム陶器が奈良市指定文化財(考古資料)となった。

この度、西大寺の重要性を再認識する講演会にかかわる機会をいただいた。調査から14年経過し、記憶も薄れつつあるが、改めてこの調査を振り返りその意義について考えてみたい。

調査地は、近鉄大和西大寺駅の南西、奈良市西大寺新田町に所在する。平城京の条坊復元では、右京一条三坊十三坪と十四坪の坪境に位置し、奈良時代後半の西大寺造営以後はその境内地に含まれる。宝亀十一(780)年成立の『西大寺資財流記帳』をもとにした西大寺の伽藍復元では、一条三坊の南西隅となる十三坪に西南角院、その北側の十四坪に十一面堂院を推定する復元案があり、この場合、調査地は西南角院と十一面堂院の境界付近になる。

西大寺は塔跡を中心に鎌倉時代に復興した現在の境内地を除き、1970年代以降、その旧境内は急速に市街化が進んでいる。近鉄線路北側においては、食堂院の発掘調査、現西大寺の北方における薬師金堂跡、弥勒金堂跡の発掘調査等が市街化と建築物建替えの間隙で実施され大きな成果をあげている。今回の調査地も、現在の西大寺境内の西側の住宅地内にわずかに残されていた畠地であったが、住宅建設が計画されたため、建設に伴う事前調査として発掘調査を行った。

調査は2009年4月8日から7月14日まで行った。調

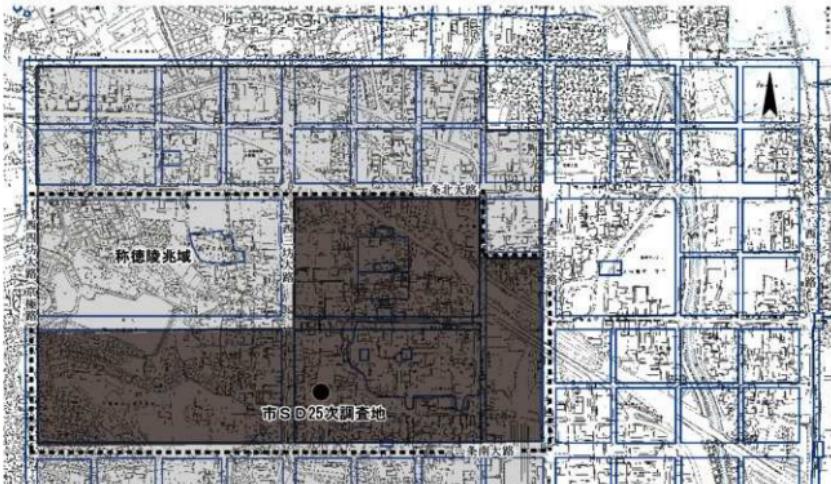


図1 西大寺の占地 (1/10,000)

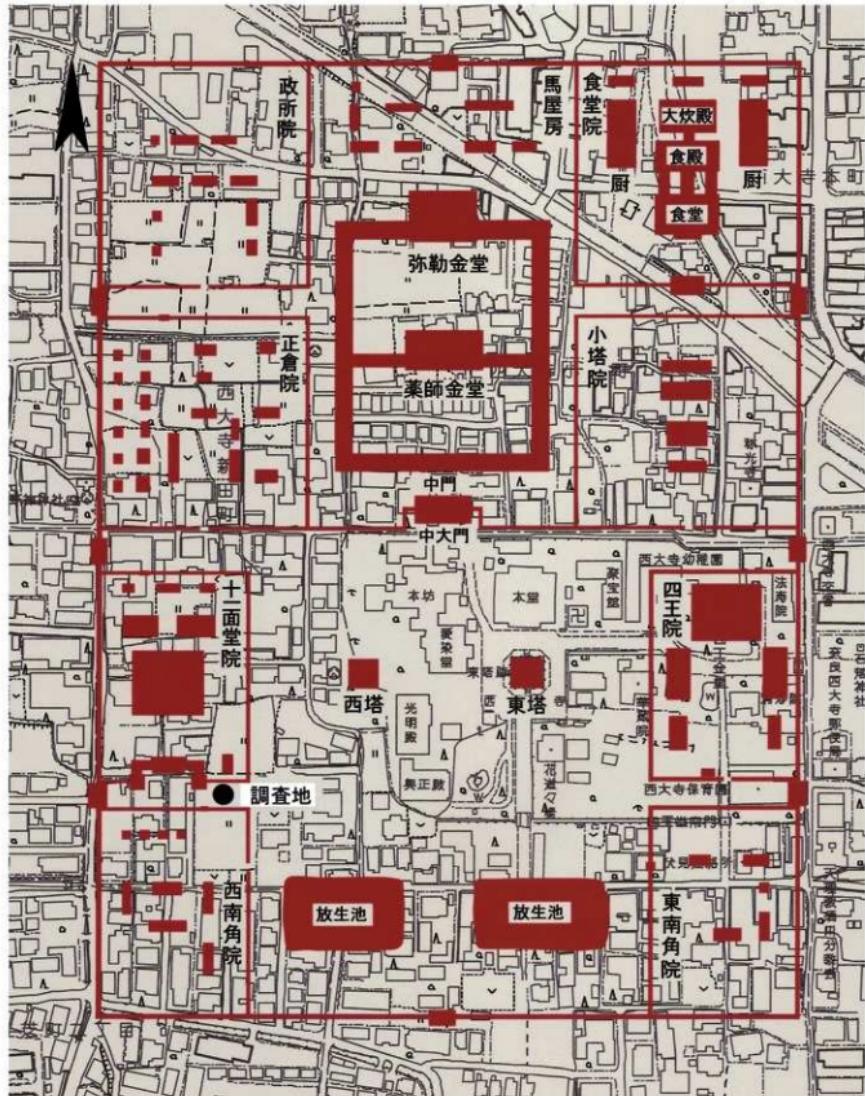


図2 西大寺主要伽藍復元案 (1/2,500)

査は南北 12 m (一部 6 m)、東西 32 m の発掘区より開始し、その後、調査区南側を可能な範囲で拡張したため、最終的な調査面積は 321 m² となった。

その結果、条坊道路側溝を踏襲したとみられる西大寺境内を区画する東西溝を検出し、溝内堆積土層から、現状では国内最古の出土例に位置づけられるイスラム陶器片、西大寺造営に関わるとみられる木簡等の遺物が出土した。西大寺造営の一端を知ることのできる新資料といえる。以下、検出遺構と主要な出土遺物について紹介したい。

II. 検出遺構

調査区の基本層序は、上から暗灰褐色土（耕作土）、暗青灰色砂質土（床土）があり、旧耕土とみられる淡青灰色砂、淡青灰色砂質土がつづき、現地表面から 0.8 ~ 0.9 m、標高 72.7 m で黄灰色粘土（地山）となる。この黄灰色粘土上面で重複する奈良時代の東西方向の溝と、溝に架けられた土橋を検出した。

東西溝は幅約 7.0 m、長さ約 30 m を検出した。溝内の堆積土は厚さ約 30 cm の灰色粘土の下に砂と淡灰色～淡青灰色粘土の互層が約 20 cm あり、50 ~ 80 cm の深さ

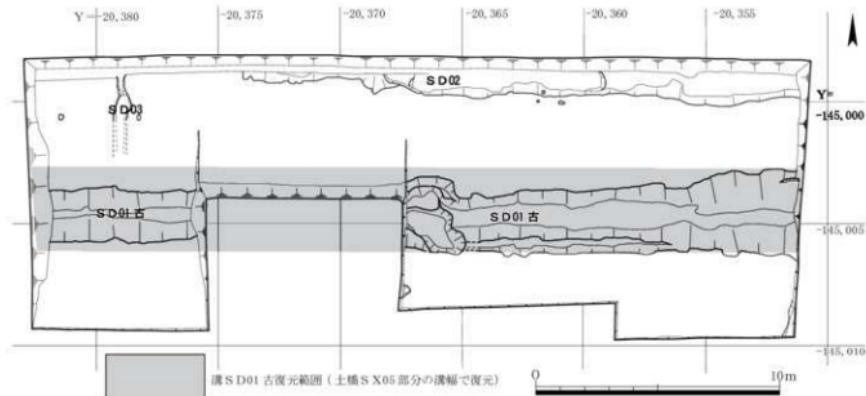


図3 古段階遺構平面図 (1/200)

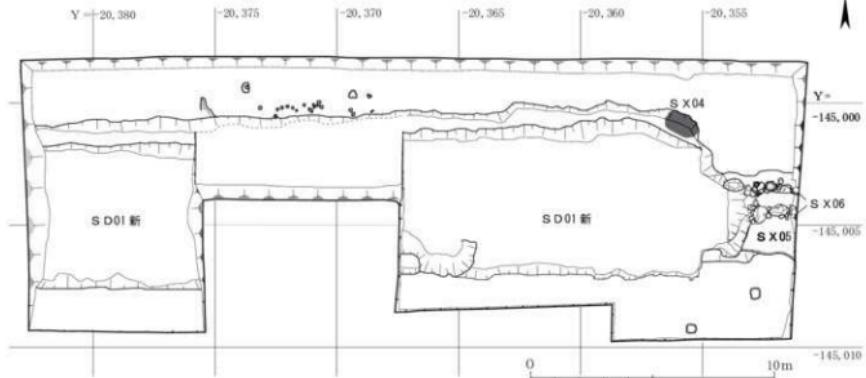


図4 新段階遺構平面図 (1/200)



写真1 発掘区全景（西から）



写真2 土層断面写真（東から）



写真3 木層層に入ったイスラム陶器（東から）

で溝底となるが、溝中央部は幅2.0～4.0mの幅で60～70cm深くなっている。この部分に大量の木屑と奈良時代の遺物を含む暗灰褐色土（10cm～40cm、以下「木屑層」とする）の堆積があり、その堆積を地山の黄灰色粘土ブロックを含む粘土層（約30cm）によって人為的に埋め立てている状況が観察できた。一段低い溝底にも部分的に薄く灰色砂の堆積がある。溝底の標高は西端で71.5m、東端で71.1mであり、西から東への水流があつたことがうかがえる。木屑層の堆積は南側が厚いことから、溝南側（西南角院側）からの投棄により形成された可能性がある。後述するイスラム陶器片は、この木屑層と上層の地山の黄灰色粘土ブロックを含む粘土層（埋め立て層）から出土しており、木屑層の形成と溝の埋め立てに時間的な差はあまりないことがわかる。

調査で検出した東西溝は、位置的には右京一条三坊十三坪と十四坪の坪境小路（一条条間南小路）の南側溝に該当する可能性が高く、西大寺造営に伴い寺内区画施設としての溝を拡幅する際に木屑などを投棄し、溝幅拡張で生じた土で、時間をおかげに埋め立てたと考えてよいだろう。拡張後の溝は発掘区東端では幅を狭め、幅60cmの石組溝となっており、この部分が土橋状になっていたことがわかる。なお、溝内堆積土の最上層からは、9世紀後半に位置づけられる灰釉陶器や、9世紀末～10世紀初頭の土器類が出土しており、溝の廃絶時期を知ることができる。

III. 出土遺物

溝内の木屑層からは木簡、墨書き土器、瓦類、土器類、木製品、金属製品、檜皮・削屑・種子・木葉・樹枝などの自然遺物が大量に出土した。木簡、木製品、木葉・樹枝などは火を受けているものが多く、別の場所で焼却が試みられた残焼物であることがわかる。出土遺物は一括で遺棄されたもので、西大寺の造営とも関わる8世紀後半のまとまった遺物として注目される。以下、この溝内木屑層からの出土遺物について述べる。

木簡・墨書き土器

溝内の木屑層からは1200点を越える木簡とその削片、約150点以上の墨書き土器が出土した。いずれも墨書きが多く、戲画等を描くものもあるが、内容が判読できる木簡としては、①西大寺造営事務に関わる木簡、②西大寺の寺内組織に関わる木簡、③習書、手控え等がある。

1は、石材を運搬するために使用した雇車二両の代金四百文の支払いに関する木簡で、裏面に支払い確認、支

払日、担当者の署名を別筆で記す。

2は西大寺金堂の造営にあたる金堂所が足場材と見られる麻柱の借用を嶋院へ依頼した木簡で、嶋院は神護景雲元（767）年九月に称徳天皇が行幸した「西大寺嶋院」（『続日本紀』）を指すものとみられる。なお、西大寺金堂は、薬師金堂が神護景雲三（769）年頃、弥勒金堂が、宝亀二（771）年頃の完成と考えられている。この木簡は3片が整理作業によって同一個体であることが判明したもので、縦方向に割り裂いた後、切り折りし、焼却するといった木簡の廃棄方法をうかがうことができる。

3は削片で、上座、寺主、都維那からなる僧職の寺内運営組織である西大寺三綱所を指すものとみられる。

4は受戒や懺悔など戒律に関わる仏教儀礼に用いられる偈磨の語句を記した木簡で、僧侶が読み上げる部分に相当する。暗記用の習書、手控えなどの可能性があり、仏教儀礼における木簡の使用例を示す資料として貴重である。

5も削片であるが、「太政官謹奏」とあり、太政官奏の書き出し部分であるが、公式令の書写の可能性を残す。

6は石上宅嗣の位階官職を記したもので、石上宅嗣が造東内長官であったことを示す新資料である。記載された官職により、神護景雲二（768）年十月から宝亀元年（770）八月までのものであることがわかる。官職の右側に一から四の数字が振られており、位署書きの見本、控えともみられる。宅嗣は神護景雲元（767）年三月の称徳天皇西大寺法院行幸時に曲水宴に侍したこと（『経国集』卷十）が知られるが、5の太政官謹奏木簡や「皇甫東朝」墨書き土器の出土と併せて、この木簡については、称徳期の西大寺の離宮化により、太政官の一部が西大寺に一時存在していた可能性を示す資料といった評価¹⁾もなされているところである。

7は習書が重なり、さらに割られているため、内容は不明だが、今回の出土木簡で唯一、神護景雲二（768）年という年紀を知ることができる。

8は全長51cmを越える木簡で、国郡名控えとして作成されたものとみられる。片面には東海道として伊賀から始まる東海道の諸国名を記し、統いて東翼道として近江からはじまる東山道の諸国名を記し、裏面には紀国、淡路国、阿波国、土佐国と南海道諸国（備前、備後）の国名と国内の郡名を記している。東翼道といった表記については東山道の読みが「トウセンドウ」であったとする指摘がなされている²⁾。武藏を東海道に書き込んでおり、武藏国が東

海道に属する宝龟二（771）年以降のものとみられるが、甲斐を東糸道とするほか、志摩（志摩）、相武（相模）、火太（飛驒）、信野（信濃）、阿波（安房）、常奥（陸奥？）など、奈良時代の標準的でない表記も見られ、興味深い。

また、9は表面に「此取る人」、裏面に「法師に成る」。10には「沙弥に成る」、11には「法王に成る」と記されており、籤引具とみられる。「法王尔成」は法王道鏡の活躍期にふさわしい。

墨書き土器には、土師器や須恵器の杯皿底部外面に「水」、「粥」、「寺」、「茹物所」、「口大之寺」、土師器甕胴部に「西大寺」（信僧）と記したものがあるが、「官」と記すものもあり、寺（西大寺）と区別される「官」の存在が注目される。また、須恵器杯底部外面に「皇浦東朝」と人名を記すものがあり、称徳天皇に仕えた唐人皇甫東朝のこととみられる。皇甫東朝は『続日本紀』によれば、天平八（736）年に遣唐副使中臣名代に従い、波斯人李密駕らとともに来日し、天平神護二（766）年に從五位下、神護景雲元（767）に雅楽員外助兼花苑司正に任じられたことが知られる。墨書きされた杯は口縁部に油煙状の物質が付着しており、献灯に使用した燈明皿ともみられるが、唐人官僚の皇甫東朝の名が墨書きされた理由については明らかでない。時期的には文献史料から知られる活動期と合致し、8世紀の来日唐人の活動を実証する考古資料

として重要といえよう。

イスラム陶器・土器類

出土土器類は奈良時代後半期（平城宮土器IV～V）のものが中心を占め、土師器、須恵器の杯、皿などの供膳具が多い。須恵器円面硯以外にも須恵器の杯、杯蓋、甕片の転用硯は数多く、筆ならしとしての墨痕が残る土器片も多い。イスラム陶器は木屑層とその上層の溝埋め立て層から出土した。口縁部を除く大小の破片34片が出土しているが、1個体分の破片である可能性が高い。器壁は厚く、肩部で厚さ約1cm、底部の高台直上で厚さ2cmを測る。肩部が張った器高40cm程度の短頸壺と推定される。素地は軟質で、細かい隙間が目立つ。厚さ0.5～1mmのガラス質の釉薬を内外面に施す。釉薬の色調は、外側が青緑色、内側は暗緑へ暗黒色で部分的に青白色が混じる。肩部破片の表面には横方向の回線間を三角に刺突して、彫り起し、回線下部には波状文を巡らしている。小さな横耳が剥れた痕跡を残す破片もあり、三耳壺の可能性がある。

イスラム陶器は平城京では初めての出土例であり、共伴する木簡からも8世紀後半といった確実な廢棄時期を知ることができるイスラム陶器の基準資料となる。この時期に西アジアの青緑釉陶器が我が国に渡來していたことが明らかになったことは貴重な成果といえる。



写真5 イスラム陶器 破片



写真6 イスラム陶器（展示台にはめた状態）

瓦類・木製品・金属製品

瓦類は数少ないが、丸瓦、平瓦片以外には西大寺西塔所用瓦である6139型式A種の軒丸瓦、同じく西塔のものとみられる三彩方形垂木先瓦、綠釉瓦片、埠がある。木製品には人形、畜串、題籤軸、刷毛柄、箸、匙、横櫛、擬宝珠形木製品などがあり、加工材の端材、削屑も多い。木筒と同じく焼けたものが多く、木炭もめだつ。金属製品には帶金具（丸鞘）、銅鉢、銅錢（和同開珎）などがある。

IV.まとめ

調査の結果、西大寺旧境内地のうち寺城南西部にあたると推定される十一面堂院とその南側の西南隅院を画する通路の南側の側溝を検出した。溝の時期は2時期に分かれ、古い堆積層には木層層が分厚く堆積しており、そこからイスラム陶器片がまとめて出土したことは大きな成果といえよう。ほかに大量の木筒・墨書き土器等の文字資料が出土した。特にの中でも注目すべきは「文人之首」と称された石上宅嗣の官位・位階を記した木筒、唐より渡來した「皇甫東朝」の銘がある墨書き土器であろ

う。

雑多なものが多量に投棄されている状態からみて、西大寺の主要部分の造営の終了に伴う周辺整備で発生したものではないかと考えられる。多量な木屑があったからこそ、水の流れが保たれ木筒が良好な状態で出土したのであろう。

西大寺跡第25次調査は奈良時代の西大寺の重要性を改めて認識せるものとなった。先述のとおり、西大寺旧境内の範囲は大半が市街化が進み、特に主要伽藍の存在が推定される部分では今後も小規模調査が見込まれる。個別の成果を蓄積し、長期的視野に立った寺域の検討が必要であるとともに、その重要性を広く人々に知つていただきことにより遺跡の保存につなげていきたいと考える。

- 1) 渡邊晃宏 2010『平城京一三〇〇年「全検証」奈良の都を木筒から読み解く』
- 2) 平川南 2010「古代史の窓－西大寺出土の木筒（上）・（下）」山梨日日新聞 5月28日・29日記事
- 3) 1) と7同じ



写真7 「皇甫（甫）東朝」銘墨書き土器

（撮影：奈良文化財研究所 中村一郎氏）



写真8 奈良三彩托



写真9 施軸瓦

2023.12.9

奈良文化財研究所都城発掘調査部創設 60 周年記念
西大寺特別公開講演会・奈良時代の西大寺

西大寺出土の木簡

都城発掘調査部
平城地区史料研究室長馬場 基

0 はじめに

1 西大寺食堂院木簡の出土

2 西大寺の食材

玄米・豆・漬物

3 西大寺と地方

伊賀の栗

4 おわりに



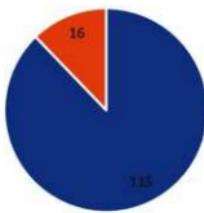
23

49

13

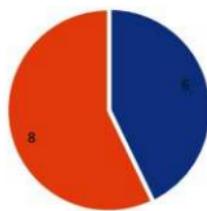
※写真の木簡はすべて西大寺食堂院出土木簡
番号は本報告の表に付した本報告内番号

平城宮・京での白米・黒米の比率



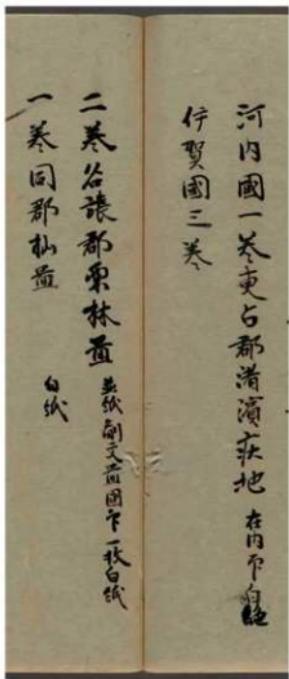
■ 平城宮・京で「白米」と記す木簡 ■ 平城宮・京で「黒米」と記す木簡

西大寺食堂院での白米・黒米の比率



■ 西大寺食堂院で「白米」と記す木簡 ■ 西大寺食堂院で「黒米」と記す木簡

平城宮・京で「大豆」と記す木簡	西大寺食堂院で「大豆」と記す木簡
0.024695365	1.195219124
35	3
平城宮・京データ数	西大寺食堂院データ数
141727	251
平城宮・京で「ササゲ」と記す木簡	西大寺食堂院で「ササゲ」と記す木簡
0.008466982	1.195219124
12	3
平城宮・京データ数	西大寺食堂院データ数
141727	251



西大寺資財流記帳
東北大学図書館蔵



本報告 内番号	本文	継	横	厚さ	型式	遺構番号	食品	出典
1	□ (十九) 月十八日用米三升四合			-95	18	1	91 SE950-e層 59 SE950-d層	米 米
2	一部伎部米五斗／正月廿三日 //			-116	-19	3	59 SE950-d層	城39-24下(183)
3	・□ (米カ) /○/□□ (蔓洗カ) □// ・□			199	27	3	51 SE950-d層	城39-22上(152)
4	・矢田部簾人米五斗 ・○上二月十八日			-145	19	5	59 SE950-d層	城39-25上(184)
5	人戸口 (同カ) 告刀自女二斗\○□ (乎カ) 八運三斗			117	24	3	51 SE950-d層	城38-18下(72)
6	籠万呂五斗			171	29	6	91 SE950-e層 32 SE950-d層	米 米
7	廿一日用米五□□ (弁廿カ) □□□□			94	11	4	11 SE950-e層	城39-27下(222)
8	美作国鷺谷野郷口 (鳩カ) 米五斗			-50	-6	5	81 SE950-d層	城38-18下(69)
9	稻田部由万呂口 (赤カ) 五斗			-58	22	3	39 SE950-d層	城38-18下(73)
10	○ 日米							城39-23下(167)
11	・△ ・白米五斗							城39-25下(193)
12	・□庄白米五斗 ・□ (年カ) 六月五日吉万呂			-96	15	4	59 SE950-d層	白米
13	・西成子智廣少白二斗五升 ・佐々貴平公時守戸白米二斗五升			202	24	3	19 SE950-d層	城39-32下・城38-18 下(71))
14	・越前国足羽郡野田郷戸主口 ・□□白米五斗延暦五年十一月 ・白米伍合○□□□□□□			-109	20	3	19 SE950-e層	白米
15	・□□ (寺主カ) 「□□ (信如カ) 」□□ (可信カ) 「□□ (饒カ) 」□□ (可信カ)			-187	-13	4	81 SE950-d層	城39-21上(138)
16	・□□ (庄カ) 黒米五斗 □ (延カ) 延十一年十二月八口 ・□□□□ (西大赤江カ) 南庄黒米五斗			-82	15	3	81 SE950-d層 51 SE950-d層	黒米 黒米
17	・延唇口 (十年カ) 十二月廿日□□□□ (万呂カ) ・□□呂昌里五斗西大寺			175	16	4	51 SE950-d層	城38-18上(60)
18				147	16	6	51 SE950-d層	城38-18上(62)
	・赤江北庄延暦十一年地子							

19	・穴太加比万呂 黒米五斗	108	14	2	51 SE950-d層	黒米	城38-18上(61)
20	・西大寺赤江北庄延曆十一年地子	116	11	4	51 SE950-d層	黒米	城39-25下(190)
21	・秦淨入 黒米五斗	126	16	5	51 SE950-d層	黒米	城39-25上(187)
22	・西大寺江南庄 黒米五斗	151	19	3	51 SE950-d層	黒米	城39-25上(186)
23	・正(延) 延十一年六月十五日吉万呂	156	21	4	51 SE950-d層	黒米	城38-18上(59)
24	〔飯×口〕				91 SE950-d層	飯	城39-32上(320)
25	□ (飯カ) △ □ (升カ) ○ □ □ □ □	-136	-6	4	81 SE950-d層	飯	城39-21上(141)
26	□□□ (飯升カ)	-63	-6	4	81 SE950-d層	飯	城39-21下(145)
27	・□ (飯カ) □□□○二月□七日□□□ (別当懸カ) □	-138	-5	2	81 SE950-d層	飯	城39-21上(140)
28	・「飯巻升○雜□口常料○十一月四日\○寺主」「□□」「□□ (可信カ) ○△」	226	26	1	11 SE950-d層	飯	城38-16下(43)
29	・別当泰//	-28	-11	3	81 SE950-d層	飯	城39-21下(143)
30	・「飯巻升○雜□口常料○十一月四日\○寺主」「□□」「□□ (可信カ) ○△」	-24	-9	4	81 SE950-d層	飯	城39-21下(142)
31	・飯巻升○□	-110	-7	4	81 SE950-d層	飯	城39-21下(146)
32	・飯巻升五合 △	-199	-13	4	81 SE950-d層	飯	城39-21上(139)
33	・△ ○寺主□○可信○都維□	291	42	2	11 SE950-c層	飯	城38-16下(41)
	・飯巻升○客房侍倉人一人給取一人合二人間食料\○三月五日\○寺主						
	・△ ○都□「開円」○少都□ (那カ) △ 「錢□實文○少寺主\○△ ○而○○○○而○○○」						

53	・○四斗五升施九石○二斗一升知 〈 斗○□ (木ヵ) 瓜一石五斗五升干瓜 ＼九日升五合○□漬	339	28	4	11 SE950-d層	ナス・木瓜・干瓜 城38-17下(50)
54	・【□ (飯ヵ) 肆升○／寺□□ (廻敷ヵ) 料／〈 「信如」□□ (可 信ヵ) 「安豐」□○／五月廿□日／○目代「慈登」//】	(86+234)	-11	3	81 SE950-d層	醤 城39-21上(137)
55	・〔麦五斛○/卷升○右津便供料○七月十六日・○□…○□ ・〔麦五斛○/○目代\・斛香料○/○〕	-40	-187	6	81 SE950	麦 城38-20上(92)
56	□手□□				91 SE950-d層	芋 城39-31下(306)
57	東園進上瓜伍拾老果／又木瓜拾丸○大角豆十把／茄子老斗或升○／七月 廿四日／○別口 (当ヵ) □□//	299	37	4	11 SE950-d層	大角豆・ナ 瓜・木瓜・ 大入 城38-16上(35)
58	醤漬瓜六斗				132	18 城38-19上(76) (圓瓜)
59	・漬無六升・ 道下米依	-66	25	3	81 SE950-慢乱	蕉 (漬無) 城38-17上(48)

西大寺・略年表

- 764（天平宝字8） 孝謙太上天皇、藤原仲麻呂の討伐を祈願して、金銅四天王像の造立を発願。
- 765（天平神護1） 金銅四天王像の鋳造と西大寺の造営を開始。
- 766（天平神護2） 称徳天皇、西大寺に行幸
- * この頃までに四王堂完成か
- 767（神護景雲1） 佐伯今毛人を造西大寺司長官に、大伴伯麻呂を同次官に任す。
- 769（神護景雲3） 4月、称徳天皇、西大寺に行幸
- * この頃までに薬師金堂完成か
- 6月、弥勒浄土を作る。
- * 弥勒金堂の完成か
- 770（宝亀1） 東塔の心礎を破却。
- * 東塔の設計変更（八角七重から四角五重へ）
- 772（宝亀3） 西塔に落雷。
- * この頃までに両塔完成
- 780（宝亀11） 『西大寺資財流記帳』の作成。
- * この頃までに伽藍全体が完成
- 846（承和13） 薬師金堂が弥勒金堂のいずれかが焼失。 ← 薬師金堂か？
- 928（延長6） 塔、落雷により焼失。 ← 西塔か
- 962（応和2） 大風雨により食堂倒壊。
- 1106（嘉承元） （弥勒）金堂が大破したため、食堂に仏像を安置。
- 1118（元永1） この頃までに創建期の建物は大破する。
- 1138（保延4） 別当済円によって四王堂が再建される。
- 1140（保延6） この頃、食堂（=弥勒金堂）と四王堂、塔1基のみ残る。
- 1206（建永1） 東大門の造営。
- 1235（文暦2） 叙尊が西大寺に入る。以後、西大寺の復興に努める。
- * この間、八角五重石塔・真言堂（現本堂の前身）・僧堂・宝生護国院・護摩堂・西室が造営される
- 1290（正応3） 叙尊、没する。
- 1307（徳知2） 食堂（=弥勒金堂）が燈籠の火による火災で焼失。
- 1502（文亀2） 兵火により四王堂中門、石塔院、地蔵院、東大門を残し、他の諸堂ことごとく焼滅。
- 同年、光明真言堂の立柱（=復興の開始）。
- 1674（延宝2） 四王堂再建。

